

令和元年6月18日現在

機関番号：22701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K20737

研究課題名(和文)乳幼児期からADに罹患している子どもの学童期におけるセルフケア獲得過程

研究課題名(英文)Self-care in schoolchildren with atopic dermatitis since infancy

研究代表者

杉村 篤士(Atsushi, Sugimura)

横浜市立大学・医学部・助教

研究者番号：20708606

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：ステロイド外用薬の軟膏処置に関するアンケート調査及び軟膏塗布量の計測の調査では、軟膏を塗る回数を医療機関で指導された通り実施できていない母親が58%いることがわかった。また、軟膏塗布量は、口頭による説明や実演による指導を受けた保護者の方がFTU相当の塗布量に近い傾向が明らかとなった。

学童期の子どもと養育者のセルフケア獲得過程に対する聞き取り調査では、子どもがセルフケアの実施に至るきっかけでは(1)症状が悪くなるのが嫌だ(2)親や友人のケアを取り入れる(3)自分で行う行かない状況になる(4)経験からケアの必要性がわかる、の4つのカテゴリが抽出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アトピー性皮膚炎の主症状である掻痒感により睡眠障害が生じることや、外観的な皮膚病変が不登校を招くことは明らかとなっており、症状の重症度と子どものQOLとの相関関係も示されている。また、親においても、子どもの症状の重症度と親のQOLとの相関が明らかとなっている。本研究で、アトピー性皮膚炎をもつ学童のセルフケア獲得の支援についての示唆が得られたことは、子どもの健やかな成長・発達と健全な家族生活につながるという。

研究成果の概要(英文)：This survey conducted a questionnaire survey on ointment treatment of topical steroids and measured the amount of ointment applied. The result, it was found that 58% of mothers reduced the number of times the ointment was applied. The amount of ointment applied tended to be closer to the amount of FTU equivalent applied to parents who received verbal explanations and instruction by demonstrations.

The design of the study is qualitative research. In this study, first author interviewed children with atopic dermatitis and their mothers by semi-structured interview. The results of analysis indicated the following 4 categories: "Want to be improved", "Learn parents and friends care", "Situation of have to do it myself", and "Understand the necessity of care by experience".

研究分野：小児看護学

キーワード：アトピー性皮膚炎 学童 セルフケア 軟膏処置

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アトピー性皮膚炎 (atopic dermatitis, 以下 AD と略す) の症状が慢性化・悪化傾向にある学童期においては、子ども自身が症状改善のために実施する対処方法 (セルフケア) を獲得することの重要性が先行研究に示されている。しかし、乳幼児期から罹患している子どもが如何にしてそれらの方法を獲得してきたかの過程は明らかにされていない。また、そのための看護支援についても明確化されていない。そこで、本研究では、AD をもつ学童期の子どもが乳幼児期からどのようにしてセルフケアの方法を獲得してきたかの過程と内容について調査を行い、これに関する要因を抽出し、症状改善へ向けた看護支援のための指針を得ることを目的とする。

2. 研究の目的

乳幼児期から AD に罹患している子どもの学童期におけるセルフケア獲得過程を明らかにするとともに、子どものセルフケア獲得の関連要因を抽出し、看護支援の指針を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、乳幼児期から AD に罹患している子どもの学童期におけるセルフケア獲得過程を明らかにするために、学童期の子どもと養育者にこれまでの AD に対するセルフケア獲得過程を半構造化面接法で聞き取り調査する。聞き取り対象を学童期の子どもだけでなく、乳幼児期から学童期にかけてケアの主体を担っていた養育者にも聞き取りを行うことで、養育者の関わりなどの関連要因が子どものセルフケアの獲得にどのように関係していたのかも明らかにできる。また、子どもだけでなく養育者にもこれまでの経過を確認することで、子どもだけでは曖昧となる過去の記憶においても正確性が確保される。聞き取りで得られたデータは逐語録を作成し、経時的に子どもの意識と行動がどのように変化し、関連要因が何であったのかを分析することで、子どもの成長・発達に合わせた子どもと養育者への看護支援の方法を見出していく。

4. 研究成果

(1) 学童期のセルフケアを研究するうえで、乳幼児期のケアの状況を把握するため、アトピー性皮膚炎をもつ乳幼児の母親を対象に、ステロイド外用薬の軟膏処置に関するアンケート調査及び 1FTU 相当への軟膏塗布量の計測を実施した。協力の得られた研究対象者の背景と軟膏塗布量は表 1 に示す。日常での実施状況に焦点をあて分析した結果、93.8%の母親が軟膏指導を受けた経験があったものの、軟膏を塗る回数を医療機関で指導された通り実施できていない母親が 58%おり、その理由は「面倒である」や「時間がない」、「忘れる」であった。軟膏塗布量は、口頭による説明や実演による指導を受けた保護者の方が FTU 相当の塗布量に近い傾向があった (表 2)。ステロイド外用薬の軟膏指導では、母親の不安や理解不十分な内容に継続的に対応していくこと、母親がイメージしやすいよう実演による指導を交えることの必要性が示唆された。

表1 対象者の背景と軟膏塗布量

n=16

	mean ± SD
対象者数 (人)	16
母親の年齢 (歳)	39.6 ± 6.6
AD の子どもの年齢 (歳) (複数いる場合は年長児)	6.4 ± 4.1
AD の発症年齢 (歳)	1.3 ± 1.3
直近の指導からの経過期間 (年)	1.2 ± 1.9
軟膏の塗布量 (g)	0.12 ± 0.07

図1 ステロイド外用薬の軟膏指導を受けた経験

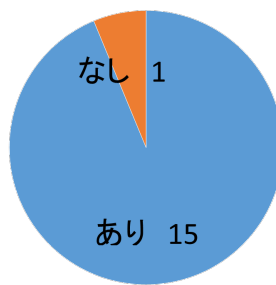


図2 軟膏指導への理解

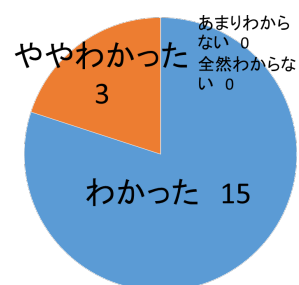


表2 説明方法や副作用への不安とステロイド外用薬の塗布量との関連

	n	mean ± SD	P-value
口頭による説明	該当者	2 0.20 ± 0.06	0.066
	該当せず	13 0.11 ± 0.06	
パンフレットによる説明	該当者	12 0.12 ± 0.07	0.511
	該当せず	3 0.15 ± 0.05	
医療者による実演	該当者	4 0.18 ± 0.07	0.046
	該当せず	11 0.10 ± 0.06	
塗布量の指導を受けた	該当者	7 0.13 ± 0.05	0.640
	該当せず	8 0.11 ± 0.08	
副作用が不安・少し不安	該当者	13 0.12 ± 0.07	0.871
	該当せず	3 0.11 ± 0.06	
塗布量を減らす	該当者	5 0.12 ± 0.09	0.977
	該当せず	8 0.12 ± 0.06	

(2)学童期の子どもと養育者のセルフケア獲得過程に対する聞き取り調査では、小学3年～中学1年の子どもとその親5組から調査への協力が得られた。結果、子どもは、軟膏の塗布3名、冷却材で患部を冷やす3名、原因物質に近づかない1名といったセルフケアを学童期において実施していることが明らかとなった。子どもがセルフケアの実施に至るきっかけでは、症状が悪くなるのが嫌だ、親や友人のケアを取り入れる、自分で行う行かない状況になる、経験からケアの必要性がわかる、の4つのカテゴリが抽出された。

症状が悪くなるのが嫌だ

子どもは、「掻いているところをみられると気になってしまう」とく掻いている時の周りの目が気になる>ことや、「ガサガサなことをみんなに言われ、皆と違う」、「肌を見られるのが恥ずかしい」とくガサガサな皮膚が恥ずかしい>と掻破行動や見た目に対する周りからの視線を気にしていた。また、「手がひび割れて痛かった」、「水を使ったり、雑巾がけの前に保湿する」とくひび割れを防ぎたかった>と症状悪化による疼痛や掻痒感の出現を予防するためにセルフケアを実践していた。

親や友人のケアを取り入れる

子どもは、「母親に保湿剤を学校に持って行くように言われた」や「母親に痒いところを冷やすように言われた」とく親から勧められてケアするようになった>ことや、「母親から自分で塗れるところは塗ってと軟膏を渡された」と、<親が行っていたケアの一部を手伝うようになった>ことをセルフケアの実施のきっかけとして語っていた。親以外にも「友達が濡らしたタオルを使っているの見て、自分もしてみようと思った」とく友達がしていることを真似してみる>と、友人のケア取り入れることでセルフケア行動を身に付けていた。

自分で行う行かない状況になる

学校での「宿泊訓練の時は自分で軟膏処置をした」、「母親がいないときは自分で冷却材を出す」と、子どもは<ケアできるのが自分しかない>状況になることが、自分でケアをするきっかけとなっていた。また、「母親が忙しそうだと自分で薬を塗る」、「母親が弟寝かしつけている時は自分で冷却材を出している」とく忙しい親への気遣い>からセルフケア行動を身に付けていた。

経験からケアの必要性がわかる

子どもは「濡らしたタオルを当てると痒みが落ち着く」、「叩くと痒みが少し落ち着く」とくそのケアで症状が落ち着いた>ことや、逆に、「汗で症状が悪くなったことがあった」、「軟膏処置や服用をしないで症状が悪くなったことがあった」とくケアをしないで症状が悪くなった>経験からケアの必要性を感じセルフケアを実施していた。また、「叩いたら少し痒みが変わるかなと思った」と、<思いついたことを試してみる>ことで、そのケアを自身に取り込んでいた。一方で、子どもは記憶がない頃からアトピー性皮膚炎に対するケアが実践されており、「原因物質を避けることがあたり前だと思っている」、「掻かないことがアトピー性皮膚炎では大切だと思う」と、<幼少期からのケアが日常になっている>ことが語られていた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

A. Sugimura, M. Asano. Self-care in Schoolchildren with Atopic Dermatitis since Infancy. Nagoya-Yonsei University Reserch Exchange Meeting on Health Sciences. 2018.

杉村篤士, 松本裕, 廣瀬幸美, 赤瀬智子. アトピー性皮膚炎患児をもつ母親の軟膏処置の実際. 第33回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会. 2016.7.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：浅野 みどり

ローマ字氏名：Midori Asano

研究協力者氏名：廣瀬 幸美

ローマ字氏名：Yukimi Hirose

研究協力者氏名：赤瀬 智子

ローマ字氏名：Tomoko Akase

研究協力者氏名：松本 裕

ローマ字氏名：Yutaka Matsumoto

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。